

ハンドボールにおけるゴールキーパーのキーピングパターンについて

911870 小前田 たまき

【研究目的】

現在、スピード化されてきているハンドボールでは、いかに得点されずに攻撃に移れるかが勝負を分けるであろう。そして、その状況においてのゴールキーパー（以下、G、Kとする）の存在はとても重要であると思われる。しかし、日本では未だG、Kのキーピングの技術・戦術体系はまとまっていないようである。そこで本研究では、ハンドボールにおけるG、Kの役割の大部分を占めるシュート阻止の動作（以下、キーピングとする）を取り上げ、G、Kが、各ポジションにおいてどのようにしてキーピングをしているのか。何がキーピングを行うために有効なのかを調べることにした。そして、その結果をもとにG、Kの技術・戦術について考察し、今後のG、Kの指導における一資料とすることを目的とする。

【研究方法】

VTRを再生して、各G、Kのキーピング状況を調査するために私案の記録用紙を用いてシュートポジションやシュートコースごとにどのように対応しているのか以下の項目ごとに集計した。

（調査項目）

- ①シュートコース（図1）
- ②シュートポジション（図2）
- ③打たれたシュートがノーマークであったかDEFとの連携であったかについて
- ④G、Kの構え
- ⑤G、Kの位置取り
- ⑥ボールミート
- ⑦ミートポイント

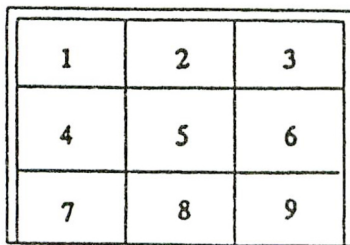
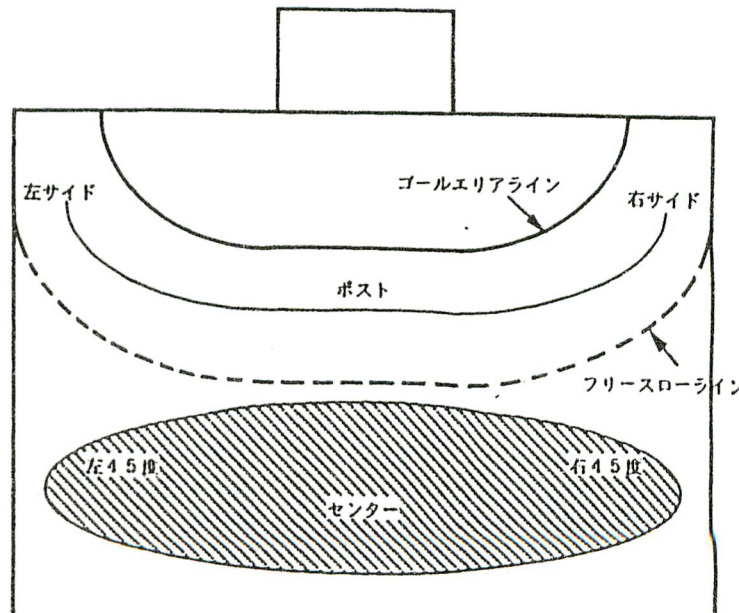


図1 シュートコース



* ⊙ をバックポジションとする

図2 シュートポジション

(対象試合)

94' 全日本学生選手権大会
 筑波大学 v s 福岡教育大学
 筑波大学 v s 日本体育大学
 東京女子体育大学 v s 武庫川女子大学
 日本体育大学 v s 東京女子体育大学
 筑波大学 v s 福岡大学

94' 広島アジア大会
 日本 v s 韓国
 日本 v s 中国
 韓国 v s 中国

92' バルセロナ オリンピック
 E. U. N (ロシア) v s ノルウェー
 韓国 v s ドイツ
 ドイツ v s E. U. N
 韓国 v s ノルウェー

93' 世界選手権大会
 ドイツ v s デンマーク
 デンマーク v s ノルウェー
 ノルウェー v s ルーマニア
 デンマーク v s ハンガリー

以上16試合を対象とした。その中で、学生界から3名、ナショナルチームから10名、計13名を対象とした。

表1 各G. Kの特徴

選手名	位置取り	構え	詰めの動作
T. K (筑波大学) 165cm	細かなフットワークで ボールに合わせている	上型	跳び出し型
M. Y (日本体育大学) 171cm	先行している脚に引き寄せ てボールに合わせている	中間型 (下)	定位置型
H. E (東京女子体育大学) 170cm	細かなフットワークで ゴールに合わせている	中間型 (上)	定位置型
M. M (JPN) 177cm	細かなフットワークで ボールに合わせている	下型	定位置型
O. W (CHN) 176cm	細かなフットワークで ボールに合わせている	上型	跳び出し型
H. M (KOR1) 173cm	先行している脚に引き寄せ てゴールに合わせている	下型	両方の型
R. J (KOR12) 174cm	小さくジャンプしながら ゴールに合わせている	中間型 (下)	跳び出し型
J. C (KOR16) 174cm	細かなフットワークで ゴールに合わせている	中間型 (下)	跳び出し型
B. S (EUN) 180cm	細かなフットワークで ボールに合わせている	上型	定位置型
S. A (GER) 172cm	細かなフットワークで ボールに合わせている	中間型 (上)	跳び出し型
S. L (DEN) (180cm)	先行している脚に引き寄せ てボールに合わせている	中間型 (上)	跳び出し型
S. A (NOR12) 174cm	小さくジャンプしながら ボールに合わせている	中間型 (下)	両方の型
C. L (NOR16) 179cm	細かなフットワークで ゴールに合わせている	上型	定位置型

【結果と考察】

調査結果より、図3に示すようにキーピングは、位置取り⇒構え⇒詰めの動作⇒ボールミートという1つの流れで成り立っていることがわかった。そして、この4つがキーピングの技術をつかさどり、それぞれを組み合わせてできるのがキーピングパターンであると思われる。

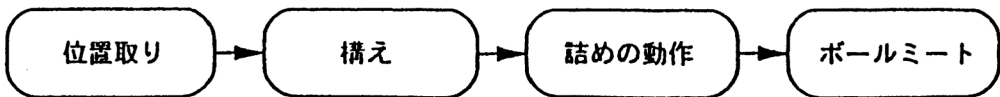


図3 キーピングを構成する技術

1) 位置取り

どこのポジションからのシュートにも対応できるようにゴール前に立って移動することである。ゴール⇄G、K⇄シューター（ボール）の位置関係でゴールに合わせるタイプとシューター（ボール）に合わせるタイプが見られた。パスワーク中でのフットワークは、細かなフットワークで微調整しながら、自分の身体を正面にもってくるように位置を取る方が良い。また、身体は静止させずにある一定のリズムをとる方がボールに対する反応が良いようである。

2) 構え

基本的には、4つの構え（図4）があり、表1では主に使われているものを取り上げた。特にサイドでは、ほとんどのG、Kが、上のコースをカバーするのが多く見られ、その中に遠目または、近目をカバーする構えが見られた。サイドは、角度が狭く身体全体でシュートコースを覆うことができる。しかし、遠目や近目をあけることでわざとそのコースに打たせて取ろうとしていると思われる。

どの構えを用いるにしても、リラックスして、シュートと思われるときに、素早く対応できることが重要である。また、対応動作を短くするため、膝や肘を軽く曲げる方が良いようである。



上型



中間型(上)



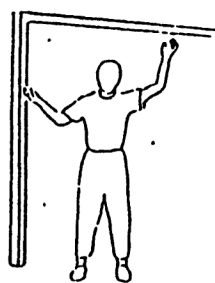
中間型(下)



下型



近目の上



遠目の上

図4 構え

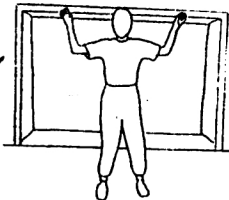
3) 詰め動作

詰め動作では、5つのタイプがあり、図5で示すように、大きく2つのタイプに分類される。1つは、打たれるシュートコースを判断（予測）してキーピングすることをねらいとしているタイプである。もう1つは、どちらか一方をカバーして、シューターに対して仕掛ける動作を入れたり、または、間合いを詰めたりすることによって、ワンコースに誘ってキーピングすることをねらいとしているタイプである。ほとんどのG、Kが基本的には、どちらかの型に分類された。しかし、中には、5つのタイプをそれぞれに使っていたG、Kもいた。

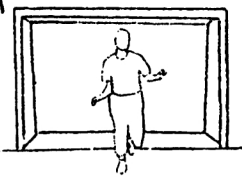
G、Kは、同じキーピングでは、相手に自分の弱点を見つけられやすくなるので様々なキーピングパターンを用いることで、意表をついたり、シュートによって、基本的な型では対応できないと思ったりした時に、逆の型を用いるようである。



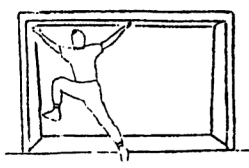
定位置で構える



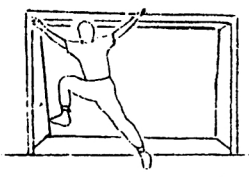
詰めて構える



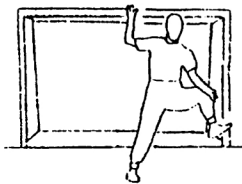
詰めながら



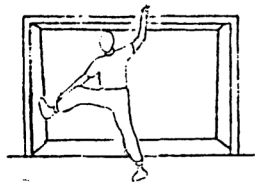
その場で阻止



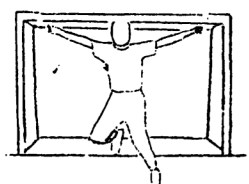
その場で阻止



跳び出し



跳び出し



跳び出し

定位置型

跳び出し型

図5 詰めの動作

4) ボールミート

ボールミート (図6) のほとんどは、ジャンプ動作で行われる。そのジャンプ動作は、大きく4つのタイプに分けることができる。

a) ジャンプ…ボール側の脚で跳ぶ動作—RJ, LJ

b) ボールの逆側の脚でのジャンプ…脚で床を蹴り、もう一方の脚で振り込んで上肢を移動させる動作—RH, RM, RL, LH, LM, LLの(R)

c) 軸を決めたジャンプ…どちらかの脚を軸として、目的のシュートコースをカバーするジャンプする動作—RH, RM, RL, LH, LM, LLの(J), 開脚ジャンプ

d) スライディング…逆脚で踏み切り、尻と脚を床につけ、下コースに手を添えるような感じの動作—RS, LS

それぞれのポジションによって、ボールミートに違いが見られたので各ポジションごとに考察した。

① Sideからのシュート

シュートコースでの死角がふえるように、自分の身体を面(壁)にしている。そして、どこかワンコースだけに絞り打たせようとするか、体全体で阻止しようとするようである。

② 中央ゴールエリア内からのシュート

Post, Cut in, FB(速攻)とノーマークのシュートほど、軸を決めたジャンプでの対応が多くなっている。シュートコースを判断するのが困難なシュートばかりなだけに、G, Kは、なるべく自分を大きく見せて、少しでもシュートコースへの死角をつくるためである。そのため、中間コースをカバーできる軸を決めたジャンプと開脚ジャンプでの対応が多かった。

③ バックポジションからのシュート

上コースでは、ジャンプと逆脚でのジャンプ、中間コースでは、ほとんどが、逆脚でのジャンプ、下コースでは、逆脚でのジャンプとスライディングが用いられていた。

逆脚でのジャンプの方が体全体を使うので防御範囲も広くなり有効である。しかし、素早い反応やスピードに押されるような切迫した状況の中では、ボール側でのジャンプやスライディングが有効のようである。

④ ミートポイント

ナショナルチームでは、両手でのボールミートが多く見られた。両手でボールをミートすることにより、身体も同時にボールによることができ、片手よりもより大きな面(壁)が作れる。また、両手でのボールミートにより、ボールコントロールがしやすく、攻撃へと素早く対応できるからだと思われる。片手でのボールミートに比べ、習得するのは難しいが、より正確なボールミートには、必要だと思われる。

【結論】

以上の結果から、

1. G, Kのキーピングは、大きく4つの技術に分けられ、それぞれの技術の組合せにより、キーピングパターンが数多く存在する。
2. 位置取りではゴールまたは、シューター(ボール)に合わせるタイプがあった。
3. 構えには基本的には、上型、中間型(上)、中間型(下)、下型の4つがあり、サイドでは遠目や近目をカバーするのも見られた。
4. 詰めの動作では、5つのタイプが見られ、大きく「定位置型」と「跳び出し型」に分類された。
5. ボールミートは、ほとんどがジャンプ動作で行われ、ジャンプ、ボールの逆側の脚でのジャンプ、軸を決めたジャンプ、スライディングの4つのタイプをそれぞれのシュートによって使い分けていた。

上記5つより、実際の試合の中で最適なキーピングを選択することがG, Kの戦術であると思われる。そして、各技術の質を高めていくことにより、高いキーピング阻止率が得られると考察される。



RJ (両手)



RJ



LH (R)



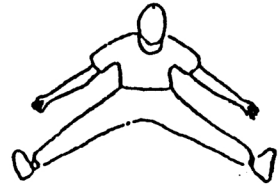
RH (J)



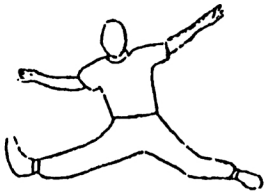
RM (R)



LM (J)



開脚ジャンプ



RS



RL (R)

(R)・・逆脚でのジャンプ

図6 ポールミート